第 54 回夏季県外史跡踏査
愛知県東部（三河国）方面（岡崎、安城、西尾、吉良、田原、新城）
～三河国の縄文時代から江戸時代（幕末）～

横浜市立桜丘高校　**加藤　敬**

８月６日（木）

小田原駅・西口―大井松田 IC―岡崎市〈岡崎城、大樹寺〉―安城市〈本證寺、南山園〉―西尾市―吉良町〈吉良歴史民俗資料館〉―吉良町〈金蓮寺阿弥陀堂、華蔵寺、花岳寺、黄金堤〉―　宿泊地

８月７日（金）

宿泊地―田原市〈田原市博物館、吉胡貝塚、渡辺崋山資料館〉―豊川稲荷―長篠〈設楽原古戦場・歴史資料館、設楽原復元馬防柵、長篠城跡・長篠城址史跡保存館〉―浜松いなさ IC― 横浜駅

（主題）没後 400 年を迎える徳川家康の原点と、高家吉良氏の領国経営の一端を探る

（報告）8 月 6 日から二日間、猛暑の中、54 回目を迎える夏季踏査を行った。今年は家康没後 400 年を迎え、その原点ともいえる松平氏の本拠地岡崎と三河一向一揆の拠点安城を踏査した。ちょうど人質時代を経て戦国大名としての領国経営に踏み出す浜松までの三河時代である。また、長篠城での武田氏との攻防も設楽が原にその実態を見ることにした。もう一つのテーマが高家・吉良氏の領国経営である。塩田をはじめとした領国経営の実際から吉良氏の実像を探ろうとするものである。

一日目午前から事故渋滞というアクシデントで多くの資料を提供、詳細に準備頂いた講師の堀江登志実氏(岡崎美術博物館副館長)及び参加者に迷惑をおかけしてしまった。岡崎と家康の関係を短時間で行ったため、三河期の家康や三河一向一揆について十分深めることができなかった。

岡崎城の家康館では 14 歳時からの三河時代の家康文書の数々を見ることができた。永禄 14 年からの花押の違いや多くの起請文、正札等当時を知る貴重な文書ばかりである。幼年ながら字句の流麗さに驚く。岡崎城復元天守で堀江氏から説明を受け岡崎を俯瞰。次に、文明 7 （1475)年、松平親忠が創建した松平氏の菩提寺「大樹寺」へ。「大樹」とは征夷大将軍の唐名であり将軍誕生を祈願したことがわかる。しかし時間の関係で「歴代将軍の位牌(慶喜は除く)」見学の時間をとれなかったことは残念であった。次の本證寺は上宮寺、勝鬘寺と並び三河一向一揆の拠点となった寺院で松平広忠時に守護不入特権が与えられた。本多正信はじめ一向一揆側についた家康家臣団も多かったが、家康は一揆関係者をすべて赦免(惣無事)し和議に持ち込み一揆の解体に成功したという。こうしたことが戦国大名として領国一円支配達成の関門を乗り越え、その後の家康の成長につながったという。鼓楼、土塁を備え現在はハスが咲き誇り、水郷に囲まれた伽藍の様子から城郭的な配置が分かった。日本有数の抹茶産地の西尾茶「南山園」に寄り、一日目の最終目的地・吉良へ向かう。

西三河最大の正法寺古墳の近く吉良歴史民俗資料館では塩田跡地に復元された入浜式の「塩焼小屋」にて吉良氏の塩田開発の説明を三田敦司氏より受ける。巷間言われている赤穂との関係はないという。当時日本の製塩の八割は瀬戸内で大規模経営の塩田地主により行なっていたが、この吉良では個人経営の家族経営が中心で、規模は一軒当たり一反余、かつ全国規模ではなく三河周辺と「塩の道」を通って伊那谷を経て長野周辺で消費されていた。足助には塩問屋も多かったという。岡崎八丁味噌『塩買入帳』によると嘉永 4 (1851)～明治 6(1873)年まで仕入れられた塩のほとんどが吉良白浜新田から購入されていた。岡崎の八丁味噌は苦汁の少ない品質の良さ（釣り石釜ではなく鉄釜を使っていたという）からもっぱらこの吉良の「餐場塩」が使われていた。三田氏はこの三河湾と伊勢とのかかわりを松坂の宝塚一号墳埴輪との関係からも力説された。また、武蔵吉良氏との関係で世田谷城、横浜の蒔田氏との関係も知ることができた。（蒔田氏は吉良氏から高家を継いだという。）一日目最後は、金蓮

寺、華蔵寺、華岳寺、黄金堤へ。吉良家菩提寺と関連寺院、そして名君の誉れ高い治水事業の一つ黄金堤へ向かう。講師は吉良公史跡保存会会員で元高校教師の黒部五郎氏である。愛知県内で三件の国宝の一つである吉良の金蓮寺阿弥陀堂では堂内に全員上がり、間近に県指定の慶派作品阿弥陀三尊像を見ることができた。側面に回ると前かがみの様子がよくわかる。正面は蔀戸である。平安期の貴族邸宅によく見られるという。その他面取りの柱・垂木等非常に簡素な造りで鎌倉期の姿をよく伝えていた。華蔵寺は義央の曽祖父の義定が建立し、墓所には義央はじめ義周墓もあり、1702 年元禄事件後の理不尽な幕府裁定を思った。吉良氏三代・義安、義定、そして義央の御影堂も特別拝観した。義央像は寄木造の衣冠束帯姿で義央自ら彩色したもので当時の姿を忠実に再現しているという。黄金堤到着時は陽が落ちてしまった。ここは義央が岡山村・瀬戸村間の谷に約 180m の堤防を築いた。堤防上へ上りそれを確認。堤防上は市民憩いの桜並木となっており義央の功績が今でも語られている。（下見時、堤防上は満開の桜並木であった。）

二日目田原へ。田原市博物館・崋山蟄居地の池之原で鈴木利昌氏より説明を受ける。田原城は 1480 年ごろ戸田宗光により築城、巴城とも呼ばれ現在は袖池・土塁・空堀の一部が残る。美濃石や一部石灰岩を使っているという。二の丸跡博物館が開館し、渡辺崋山関係資料(国重文)が展示されていた。師の谷文晁作品も崋山画とともに見ることができた。池ノ原公園には渡辺崋山が蛮社の獄で蟄居処分となった大蔵永常製糖屋敷が復元されていた。そこから数百ｍの近場にあるのが吉胡貝塚である。大正 11、12 年に京都大学の清野謙次により発掘調査が行われ 300 体を超える人骨が発見された。その多くに抜歯や叉状研歯がみられたという。吉胡貝塚資料館の増山禎之氏によると 10 年ほど前の調査で貝塚規模 4500 ㎡という東海地方最大規模の貝塚ということが判明した。増山禎之氏の説明を受けながら博物館内から発掘現場展示施設を歩く。清野謙次の功罪とともに明治から大正期の考古学界の状況も知ることができた。現在、天理大学に多くの資料があるという。発掘時のまま復元された屋外断面展示施設で貝塚の状況を確認した。19 号人骨発見場所には大正期発掘時撮影された矢崎岩があり、参加者一同当時と同様に記念撮影に収まった。ただ、住居跡は発見されていないという。渥美半島の埋葬儀礼の中心としての場ということらしい。

「ええじゃないか」発祥といわれるのが現豊橋市といわれるがその広がりを考えながら豊川稲荷で昼食休憩、午後は最終目的地の長篠・設楽が原へ。設楽が原歴史資料館屋上より設楽が原古戦場を俯瞰。織田信長陣地、家康陣地そして連吾川を挟んで勝頼陣地を確認する。講師の湯浅大司氏によると資料館から 5 個の火縄銃弾丸が発見されていることから織田・徳川連合軍にとり連吾川を挟んでの狭い谷が火縄銃の効果を発揮するのに効果的だったことがわかる。この地は湿田で武田軍は機動力を発揮できず動けなることも想定し、地形を利用した戦いを模索したとも。最後は馬防柵でもう一段食い止める。連吾川が堀の役割、馬防柵が石垣の役割を果たし、あくまで防御を固めたことが連合軍の勝因ではないかとの説明に一同納得した。三段打ちについては自然発生的なもので全否定はできないと断言された。突如の雷鳴とともに豪雨が襲い、馬防柵は車窓からの見学となった。長篠城では史跡保存館前館長の山内祥一氏により、長篠城の立地、地形から長篠攻防の説明を受けた。「設楽が原」と「長篠」では勝頼と信長との評価の違いが感じられ、これも歴史の断面の一部か。

2 日間の三河巡検も無事終えることができた。そして今回も現地の専門家並びに最新研究の成果から多くの発見を得、充実した研修を終えることができた。渋滞により当初の目的の一つ、「三河時代の家康」について十分深められなかったところもあったが、次回はこの研修を踏まえ遠江期の家康像にも迫りたいと企画を練っている。多くの皆様の参加を願っています。

▲大樹寺山門下より岡崎城を望む

▲本證寺

▲吉良の塩田：焼塩小屋と入浜式塩田

▲金蓮寺阿弥陀堂(国宝)

▲吉胡貝塚矢崎岩にて

▲吉胡貝塚屋外発掘現場

▲長篠城縄張概図

▲